

末黒野

すぐろの



11月号

(通巻903号)

緑蔭

くろぐると山又山や星涼し
暗闇を耐へたる証蟬の穴
気塞ぎをやうやく払ひ梅雨の明
凌霄や垣一面の照り返し
白南風や明るさ戻る切通し
夕蟬の頻りや用のあれこれと
転けるなど後ろより声夏帽子
緑蔭や子らの野球を観る母ら
それとなく的をはづして心太
いつしかに名草に絡み灸花
新涼や雲へんぺんとほぐれ初め
白壁へ緋色を曳けり秋あかね

森清堯

青芒

鉢一つ買うて蜜蜂連れ帰る
梅雨雲のずしりと覆ふ港かな
束の間の明るさに浮き梅雨の蝶
枇杷熟れて見えますと札ガラス窓
切岸へ波立ち上がり青芒
雲の峰海石へ波の十重二十重
夕蟬や棚引く雲の茜色
深々と青空踏まへ雲の峰
凌霄や梯子を昇る消防士
水船やうの字しの字の大鰻
冷奴一角崩し愚痴零し
胸張つて威を張る声や羽抜鶏

岡野里子

青葉木菟

黒滝志麻子
(顧問)

青田より風得て走者ひたすらに
灯火の洩るる窯場や青葉木菟
蘆茂る風に抗ふほどでなく
ゴンドラの影の行きかひ街炎暑
月曜の新聞軽し朝曇
熱帯夜ナースの抱く新生児
浮雲と遊び心や踊草
晚涼や山へ凭るる灯のあまた

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



海霧はれて

森清信子

鴨足草庫裏の板戸の軋みけり
雨水のがれ場を奔り竹煮草
啄木鳥や山荘の窓開け放ち
白樺のさやぎ遠ざけ夏の霧
海霧はれて大島小島数の島
折り返しの村のバス停百日紅
翡翠を待ちたる甲斐やカメラマン
見るだけで滅入る鬱の字熱帯夜
あやしげなる夏雲の湧く高嶺かな
雨上り遠かなかなに耳澄まし

夏座敷

石黒興平

踏み減りの礎に影なす四葩かな
青墨のにじみ涼しや隸書軸
閑かさや拝殿下の蟻地獄
何よりの風のもてなし夏座敷
船笛や五月闇濃き台場跡
梅雨明けや空深くなる広がる
昼寝覚二十五階の風の中
まだ力ぬけてはをらぬ蟬の殻
一塊に見ゆるビル群朝曇
雲の峰市旗と国旗と五輪旗と

葛の葉

菅野日出子

手作りの皿の無骨や冷奴
遠ざかる雷や相和す鳥の声
蟻蠓や見守られつつ夕散步
紫陽花や終の一花の彩つくし
亡き夫に似し石仏や苔茂り
蟬しぐれ寺の巨木をふくらます
どんよりと雨に明けたる今日の秋
葛の葉や墓地造成の進む丘
背に貼る膏藥二枚秋暑し
雨戸繰る初ひぐらしの声かすか

鯛不漁

田中臥石

撒餌して埠頭の鰯のさびき釣り
船帰り波に浮き引く鰯を釣る
新聞の取材や梅雨の雲走り
朝顔の紺に籠れる海の音
ちちははの墓参怠る盆終る
原稿の付箋に走る秋の風
ふるさとの葡萄の匂ふ荷の届く
宵待の花やいさばの廃墟跡
電線に音符の如く鴉並ぶ
出羽林檎送ると友の電話声

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



天の川

太田良一

水打つて少年野球始まりぬ
水打つて修行の僧を迎へけり
黒い雨を読む真夜中や流れ星
渡る日は素顔がよろし天の川
結界を越ゆれば靈気秋の蝶
月光や一億年の呼気吸気
ふるさとの駅弁探す残暑かな

白南風

大川曄美

ひらひらと光に乗りぬ竹落葉
田の主の貌して坐せり墓
白南風や潮の香纏ふ港町
雲の峰コンビナートを借景に
浜木綿や干潮の磯の文学碑
対岸の裏にちらちら夜涼の灯
一湾の紡ぐ波音夏の月

一夜酒

岡田史女

石を組む庭師の腰の蚊遣香
炎天に五輪やブルーインパルス
空つぽの詩囊充たせり一夜酒
ふる里は豪雨粗きや蛭蓆
走り根に足すくはれぬ晩夏光
仰ぎ見る空の深さや秋に入る
みんなみの雲の量感稲光

若山流

小田嶋野笛

瑠璃蜥蜴

斉藤マキ子

暫くは舌に遊べる氷かな
打水の半径五尺別世界
眠りたる稚へ添ひ寝やあつぱつぱ
御唯子は若山流や夏祭
向日葵や探して遠き郷の空
行く鳥の影焦がすかに大夕焼
テレビ見ぬ日の涼しさよ淋しさよ

夏

蝶

加藤静江

梅雨晴や丘に国際信号旗
万緑に染まりし一日四季の森
夏蝶の舞ふや大佛次郎館
蒲の穂のうち揃ひたる静寂かな
明け易や体内時計狂ひ初む
驟雨来る人出払ひし駐在所
月下美人白を極むる夜の深く

晩夏光

高木邦雄

瑠璃蜥蜴苦もなく尻つぽ捨てにけり
大河みな支流を持ってり梅雨出水
甚平に浮名流せしむかしあり
本借りてよりの縁やこころぶと
一山の蟬しぐれ聞く七七忌
外灯にぶつかつてをり蛾の巨体
林立のクレーン灼けて街灼けて

孟蘭盆会

長尾タイ

みんなの波長崩るる通り雨
晩夏光怒濤に晒す胸の内
草矢打つ打ち合ふ友の逝きしまま
嘘ひとつ帳消しひとつ冷し酒
孟蘭盆会姉の叱咤のなつかしき
八十路過ぐるはらから五人生身魂
蕎麦の花雲居に浮かぶ浅間山

蟬しぐれ

今村千年

蒼天へ白きゴンドラ浜は夏
遠き日の空襲のごと夕焼けて
洒落つ気の考の形見やかんかん帽
古刹へと続く古道や蟬しぐれ
道草の子のランドセル蟬の殻
馥郁と桃の香の朝餉かな
身に入むや近詠一句読み進み



青炎集

森清 堯選

横浜 櫻本武志

梅雨長し雨晴雨のオセロめき
伐り惜しみされて赤々花柘榴
壁掛けの麦わら帽子出番待ち
なれそめはふるさとの川草の笛
かぎりなくやさしき夕日冷奴
写メールの五山送り火淡き恋

横浜 滝口洋子

新宿 浅岡朝實

梅雨明や大禍なきかと打つメール
目覚しや徹夜の耳へ蟬時雨
蟬時雨十日の命つくるまで
鷺草の飛翔レンズの中に留め
何処までも紫の空夏の暮れ
足元に光るとんぼやアスリート

川崎 滋野 暁

大網白里 亀卦川菊枝

描かるる猫はカラフル夏の廊
雷鳴や吾の詩囊の膨らまぬ
あれこれと歳時記録るや夜の秋
同病と思しき人や茗荷の子
黒雲を抑ふるやうや虹の帯
八幡宮の階たたく白雨かな

文机の禿びし鉛筆夏の月
沖晴れて祭中止の浜通り
引き波に尻餅つく子雲の峰
ゆつくりと予後の夫ゆく青田波
雲の峰高きに崩れ友逝けり
若きらの知らぬ八月十五日

横浜 杉山弥生

横浜 山崎稔子

打水や角打ちを記す筆太き
伐採のテープ巻く樹や晩夏光
リフォームの終の住まひや葦の花
向日葵や絵心誘ふ薯のいる
池を被ふ水草の花雲迅し
ミスト降る萩のトンネル通り抜け

梢より零るる光月涼し
改革の波立つ埠頭梅雨深し
初蟬や一湾望む丘の上
まぢまぢの噴水の穂や風のまま
二千歩を歩き切つたり夕涼し
打ち合ひは子の優勢や水鉄砲

横浜 松浦哲夫

西東京 石井雲雀

源流の滴り集め大河なる
昼寢覚辞書を枕の生欠伸
昼の蟬けやき並木を我が物に
玉の汗長き上りの峠道
鳴神のご機嫌悪しまた光る
雲の峰筑波の山を鷺掴み

出迎への準備の仕上げ水打つて
入道雲我が街並に湧き上がる
新車輛の色取り広告冷房車
ケーキもて祝ふ米寿や避暑の宿
ハンモックに身を任せたり風のまま
新涼や木洩れ日の中たもとほり

大網白里 鈴木礼子

横浜 本間せつ子

穂孕みの青田一枚つむじ風
遺さるる松整へて涼しさよ
向日葵やこころ満ちたる句会終ふ
夕焼や空き家の壁の鴝色に
燭揺らぐ盆灯籠や雨の庭
敗けみたる高校へ賛魂祭

ときめきや泰山木の花開き
一輪の白百合野路に輝けり
夕涼み星の話のふたつみつ
一瞬や千の海猫羽搏きて
芋の露墨池に注げば小さき湖
秋草やさざ波光る千曲川

耕 土 集

岡野 里子



悲鳴とも聞ゆ令和の秋の蟬
はや八月されど八月重き月
秋暑し右往左往のセルフレジ
釣人の背に猫や秋の屋
貝拾ふ父と子の影秋の浜

横浜 喜田 君江

翅一枚数多の蟻の担ぎゆく
向日葵やコロナゆらめくスタジアム
白雨きて地下鉄出口人の群れ
万病の癒ゆると謂れ噴井汲む
坐禪石の苔千年や木下闇

横浜 小林 拓路

顔ゆがめ曲ぐる体操今朝の秋
鉄条網の基地を隔てて蓮浄土
百年の銀杏を登る蟻の列
五百年の古刹に掬ひ山清水
コスモスを眺めて三里無人駅

横浜 森竹 治郎

熱帯夜猫も寝返り打ちにけり
鐘樓の影絵となりぬ揚花花火
湧く雲や頂隠す夏の山
深山の音をかき消し濁しぶき
かなかなや夕暮方の峠道

横浜 鈴木 英雄

朝涼や食器ぶつかる音に覚め
しみじみと古希に杯挙ぐ晩夏光
片蔭に寄せて喇叭や豆腐売り
一条の夕日横たふ夏座敷
大の字の胸に読本夏休

横浜 佐藤 勝代

空蟬の爪の食ひ込む葉裏かな
激闘の選手の汗や金メダル
夏の陽が好きとバイクの配達人
外出を怯む八十路やこの暑さ
朝一番沸かす麦茶や大葉缶

横浜 秋山 文子

白馬岳を背の青田風渡る
香ばしく岩魚焼けたり煤薬缶
雲速き信濃の峰や涼新た
高原の遠き虫の音闇深し
溪風に乗る秋茜小屋遠く

横浜 内山 みち

一キロを五ミリの輪切り胡瓜漬
店先の夫妻木匙で氷菓子
一服の長椅子梅のソーダ水
向日葵や茎に支柱の十二本
秋立つや買ひ求めたるスニーカー

横浜 大庭美智代

黄金なす丹後半島麦の秋
梅雨晴や手話の合唱福祉会
荒南風に舳先揃へて舟屋かな
道をしへ久々なれど故郷ぞ
ぢいぢいと吾を呼ぶごとし蟬時雨

横浜 杉山 善信

送り火の揺れて別れを惜しむやう
菩提寺の由緒の古木秋澄みぬ
台風 comes と予報や雨戸ひく
蓑虫や母の形見のバッグ抱き
子規庵や主を偲ぶ糸瓜柵

横浜 佐々木澄子

薄暑なり身の置き所なき家内
大夕焼へ向かひ自転車こぐ家路
百寿の兄戦争語る盆の宵
つくつくし行き来の忙し救急車
市長選夫と連れ立つ宵の月

横浜 白居 澄子

梅雨晴や紺の長靴逆さ干し
国後や夏の雲立つ峠道
船宿や西日張りつく古畳
藤椅子や巨人蠟足の義母の背
塩焼の鮎の骨抜き箸さばき

横浜 松川 昌義

草揺らし潜むる影や蟹の穴
窓際に座卓ひとつや夕端居
暮初むる峡の駅舎や蟬時雨
ちちる虫夫の寢息の枕辺に
目を凝らす相撲番付秋日和

横浜 平田 きみ

知らぬ間に傘広げたり梅雨きのこ
庭隅をすると蛇や音もなく
荒梅雨の伊豆山神社樟木立
サーフィンの茶髪の男技見せて
悠々と庭を行き来や鬼やんま

横浜 村田 敦子